

中国湖北省土家族における「女兒会」の誕生と観光化 —地域エリートの民族文化への関わりを中心に—

龔 卿民

The Birth of “Jojikai” and the promotion of tourism in the Tujia people of Hubei Province in China: focusing on the regional elites’ involvement in the ethnic culture

GONG, Qingmin

Abstract

The article is a study that tries to discuss on the process of the creation of ethnic culture by focusing on the tourist culture of the Tujia called “Jojikai” in Hubei Province. The ethnic tourism of China started in some remote areas such as Yunnan Province in 1980s. In 1990s, the re-evaluation, restoration, a new creation and organization of minority ethnic cultures were seen by tourism development. The ethnic tourism of the Tujia regions started from 1995. Most Tujia people are widely distributed in four provinces in China, and have been deeply influenced by Han people. Thus they don’t have a distinct feature of a minority ethnic group. The article focuses on the representative tourism culture of Tujia called “Jojikai” in Hubei Province, which traces the development process of the ethnic tourism of Tujia, and discusses on the representation of “ethnic culture” developed between local elites and ethnic tourism.

Keywords : ethnic tourism, “Tujia”, local elites, “Jojikai”

要旨

本稿は、湖北省の民族観光の発展における民族文化の創出過程を、「女兒会」という土家族の観光文化に焦点を当て考察した研究である。

中国の民族観光は、1980年代に雲南省などいくつかの辺境地域で始まった。1990年代になると、観光開発により少数民族文化の再評価や復活、新たな創出や再編などがみられた。土家族地域の民族観光は1995年から始まったが、土家族の多くは中国の4つ地域に分布しており「漢化」の影響が強く、少数民族として目立った特徴がない。

本稿は、湖北省土家族の民族観光において代表的な観光文化である「女兒会」に焦点をあて、土家族の地域エリートによる民族観光の発展の過程を跡づけ、地域エリートと民族観光の相互関係に展開される「民族文化」の表象について考察する。

キーワード：民族観光、土家族、地域エリート、女兒会

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

中国の民族観光において、民族文化は観光開発によって観光資源となり商品化される一方、民族文化そのものも再評価され、再構築あるいは創出されてきたことは、これまで多くの研究が指摘している〔兼重1998, 曾1998, 陶2010, 瀬川2003b, 2013など〕。

民族観光においては、当該地域政府が民族文化の創出や活用において主導権を持っているが、中でも、地方エリートは、観光開発による民族文化の創出において極めて重要な役割を果たしてきた。例えば、雲南省の事例では、旅行ガイドブックや概説書でシブソーンパンナーを、美しく神秘的で、「緑の宝石」と表現し、独特の「伝統文化」をもつ少数民族がつつまじやかに暮らしている様子を描写するが、このような「風景」の創出という行為に、少数民族出身の知識人や民族幹部が大きな役割を果たしているという〔長谷川1995: 301〕。

このような民族観光文化と民族エリートの関係について、兼重（1998）は、民族観光における民族文化の創出において、地方エリートおよび少数民族エリートの重要性について指摘しているが、そのなかで少数民族エリート＝幹部と一括りしている〔兼重1998: 143〕。

しかし、本稿では、民族観光において民族文化を創出する人々を「民族エリート」ではなく「地域エリート」と呼ぶことにする。何故なら、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出するエリートのなかには、土家族以外の漢族や苗族などの出身者もいることや、また、そのエリート構成についても、少数民族幹部だけではなく、地域の知識人など他の社会的身分の人もいるからだ。ここで、本論の「地域エリート」を、(1) 地域の知識人、(2) 少数民族幹部、(3) 地域の企業家、(4) 民族文化の伝承人の4つのタイプに分類し、それぞれの地域エリートと民族観光の関係について考察する。

土家（トゥチャ）族の民族文化も、上述のように、民族観光により創られたものであると言える。しかし、民族観光において、文化のある部分がどういう基準で観光資源として選ばれ、また、どういう過程を経て民族または地域文化になるのかということについては、国家あるいは地域政府の政策の重要性が指摘されているが〔馬2003, 横山2004など〕、民族地域エリートの具体的な関わりについてほとんど明らかにされていない。

さらに、土家族の多くは、湖南省、湖北省、重慶市、そして貴州省の4つの隣接地域に分布しており、それらの地域では同じ土家族と言っても文化の相違があるほか、民族観光の展開や発展の程度も異なる。各地の土家族の民族観光に違いがある上に、長期に渡って「漢化」され、その「少数民族的」特質を徐々に喪失してきた土家族が、全国的な民族観光ブームのなかで民族観光を展開し民族文化を創出していく過程や創出された民族文化が土家族文化にどう位置づけられるのかといった問題については、さらなる議論が必要だと思われる。

そこで、土家族の民族観光に関する先行研究を見ていくと、日本では高山（2007）が湖南省の土家族について、その民族観光が「土家風情園」など民族テーマパークという形で展開されていることや、また、張家界の「自然観光」と鳳凰古城の「人文観光」についても詳しく取り上げ、さらに、土家族の観光資源として、歌垣、踊り、婚姻習俗が利用されていることについて詳細に述べている〔高山2005, 2006など〕。その他にも、土家族の民族観光の資源としての建築や飲食、服飾などの利用や開発に注目した研究〔韓2010, 李・余2011, 馬2014など〕や、

そうした民族観光が民族文化に及ぼす影響や問題点、保護対策に焦点を当てた研究〔王2016, 田2012, 張2008など〕などが多く見られるが、いずれの研究においても、本稿で取り上げる土家族のイベント観光そのものや地域エリートと民族観光の関わりについての分析はほとんど見られない。

そこで、本稿では、土家族の民族観光のなかでも特に湖北省恩施地域の土家族の代表的な民族観光文化の1つである「女兒会」と呼ばれるイベント観光に焦点を当て、地域文化および民族文化の創出の過程で浮かび上がってくる土家族の地域エリートと民族観光の相互関係およびその「民族文化」の表象の在り方について考察する。

本論の流れは以下の通りである。第2章では、まず、土家族全般について概観した後、湖北省の土家族について、その特徴やその民族観光の歴史と現状について紹介する。次に、第3章では、「女兒会」の由来や伝承、観光開発の過程と地域エリートの関わり、その観光化を通して浮かび上がってくる問題点を明らかにし、最後に、民族観光により創出された民族文化の表象と土家族文化の関係について考察する。

1.2 調査地と調査対象

本研究の対象となるのは湖北省恩施土家族苗族自治州（以下「恩施州」と略す）である。恩施州の前身は、1983年に「民族区域自治」¹制度により少数民族自治州として成立した鄂西土家族苗族自治州であるが、1993年に改名して恩施土家族苗族自治州となった。恩施州は湖北省の西南部に位置し（図1参照）、湖北省で唯一の少数民族自治州であり、国家の「西部大開発」²政策の対象地域でもある。恩施州の人口は約403万人、総面積は240平方キロメートルである³。その民族構成は、少数民族（54%）と漢族（46%）からなり、少数民族の大半は土家族と苗族が占める。恩施州は、その恵まれた自然環境と少数民族が多く分布していることから、近年は観光産業が発展している。恩施州には8市県があり、その行政の中心の町は恩施市である⁴。また、本論で事例として扱っている「女兒会」の起源地は、恩施市紅土郷⁵の石灰窯村⁶である。

本稿のテーマである「女兒会」は、1949年の建国以降に復活したが、「文化大革命」により一時中止され、「改革開放」以降の1980年代に地域エリートにより伝承されてきた。さらに、1995年以降の全国的な民族観光ブームにより、恩施州の代表的文化として観光化されてきた

1 中央政府の統治に基づいて、少数民族地域で自治地域が成立している。それら自治地域では、自治組織と自治権を有している。

2 2000年から実施され、東部沿海地区の経済発展を利用して西部内陸部の経済と社会の発展を目指している。その政策の範囲は四川省や重慶市の直轄市と広西壮族自治区など合計12地域、その中に3つの自治州（恩施土家族苗族自治州、湘西土家族苗族自治州と延辺朝鮮族自治州）が含まれる。

3 恩施州統計局・恩施州調査隊・恩施州調査観測分局編2016『2015恩施州統計年鑑』pp.51-53。

4 恩施土家族苗族自治州政府ホームページ：<http://www.enshi.gov.cn/zzf/zq/>（2017年8月20日参照）。

5 恩施市の東南部に位置し、恩施市内から110キロメートルの距離にある。紅土郷の総面積は約231平方キロメートルで、総人口は4.8万人である。恩施市紅土郷政府ホームページ：http://hongtu.es.gov.cn/htgk/201206/t20120625_49397.htm（2017年8月20日参照）。

6 紅土郷の東南部に位置する。面積は41.57平方キロメートルであり、人口5,290人である。2002年に石灰窯郷から石灰窯村へ変更し、それ以降紅土郷に属する。

が、その観光化までの過程と地域エリートの関与の詳細が今回の研究の対象である。調査は2014年8月に恩施市の土家族テーマパーク「土家女兒城」と、2017年2月と2017年8月の3回に分けて、石灰窯村と恩施市の調査対象者の家で行った。調査方法は現地での聞き取り調査のほか、現地で様々な文献資料の調査も行った。



図1 湖北省における恩施州の位置 出典：www.baidu.com (2017年8月20日参照) より筆者作成

2. 湖北省土家族とその民族観光

2.1 土家族とは

土家族は中国の湖北省、湖南省、貴州省、重慶市に隣接する山岳地帯、即ち武陵山区に分布し、人口約835万人（2010年）⁷で、主な生業は農業である。土家族の存在が国家によって承認されたのは、政府の「民族識別」⁸工作によるもので、土家族の言語などを識別証拠として、1957年に「単一」の少数民族として認められた。その後の中国の「民族地域自治」政策により、土家族には、1957年に成立した湖南省湘西土家族苗族自治州と、1983年に成立した湖北省鄂西土家族苗族自治州（現在の湖北省恩施土家族苗族自治州）の2つ自治州の他に、湖北省、湖南省、貴州省と重慶市に8つの土家族自治県（うちの4つは土家族苗族自治県）がある。また、土家族は、分布地域によって、ほぼ「北支」⁹と「南支」¹⁰に区別される。「北支」の土家族

7 中華人民共和国国家統計局ホームページ：http://www.stats.gov.cn (2017年8月20日参照)。

8 そのきっかけは、1950年に田心桃さんによる民族識別の要求であった。中国国家政府は1950年から、国家安定と少数民族の権利を確保するため、当時の全国400民族を識別し、その民族身分を確認した。1983年までに、中国は漢族と55少数民族という民族構成が確定した。

9 湖南省の湘西土家族苗族自治州と張家界市、湖北省の恩施土家族苗族自治州と宜昌市の土家族。

10 重慶市の渝東南地方、貴州省の黔東北地方と、湖南省湘西土家族苗族自治州鳳凰県の土家族。

は「bizika」¹¹と称され、「南支」の土家族は「mozihei」¹²と自称している。

2.2 湖北省土家族

上述したように、土家族は大きく4つの地域に分布し、それぞれの分布地域によって、文化に違いがあり、民族観光の展開もそれぞれの地域により異なる。湖北省の土家族の多くは、省の南部の恩施州と長陽土家族自治县、五峰土家族自治县に分布しており、それらの地域で漢族や苗族などの他の民族と一緒に生活してきたので、その文化は特に漢族や苗族などの影響を強く受けている。また、湖北省と他の地域の土家族の文化の間には、祝祭日や儀礼、物質文化などにおいて多少違いがある。例えば、湖北省と湖南省の土家族には織物の「西蘭卡普（シラアンカプ）」があるが、貴州省や重慶市地域の土家族にはない。

2.3 湖北省土家族の民族観光

中国において観光は、「自然旅遊」（自然観光）と「人文旅遊」（人文観光）に大別され、民族観光は「民族風情遊」と呼ばれるように、少数民族の風俗習慣を指す「民族風情」という言葉が重要な意味を持つ [高山2007: 20-21]。また、中国の民族観光は、「改革開放」後の1980年代初期から、雲南省などいくつかの特定の辺境地域で始まった。中国政府は民族観光を、民族地区の有力な地域開発手段として推進したため、現在、都市における民族村やテーマパークとして発展している [曾1998: 44]。

土家族の民族観光は1990年代以降に始まり、中国の民族観光においては後発地域であるが、観光ブームに合わせて民族観光を積極的に推進してきた。民族観光は土家族の人々の経済状況の改善や地域発展の重要な手段として利用されている一方、土家族を漢族から区別し、民族文化をアピールすることによって民族意識の強化にも結びついている [薛ほか2012]。また、土家族は、言語や生活習慣の上で周辺の漢族とほとんど区別がないほど「漢化」しているとされるが、土家族の民族観光は、この「漢化」された「土家族文化」の中から漢族との違いを意識的に選び取り、少数民族土家族の文化として確定する重要な方法の1つである。

中国国家旅遊局は、1995年に、「民俗風情遊」つまり、少数民族を中心とした民族観光を展開する観光政策を打ち出した。湖北省は、その全国的な民族観光ブームのなかで、国家の観光政策に沿って省内の民族観光を推進し、特に省内の少数民族地域である恩施地域の経済発展を促進するため、その地域の民族文化の観光開発に力を入れてきた。当時、湖北省は「1995年中国湖北民俗風情遊暨恩施土家族女兒会活動」をテーマに、全省の民族観光を、恩施州と「女兒会」を中心に展開していったのである。

恩施地域の民族観光は、自然観光や歴史観光との繋がりが強く [陳ほか2014: 30]、また、その土家族観光は、住宅、服装、飲食、祝祭日などの習俗がメインとなっている [李ほか2011: 29]。さらに、当初は郊外の自然観光地や恩施市内での民族文化の展示が主であったが、近年は、民族イベントと民族テーマパークが観光の中心になっている（表1参照）。

11 土家族語での意味は、ここの人。

12 土家族語での意味は、巴国の子孫、巴人。

表1 恩施地域土家族の民族観光内容

観光項目	観光内容	観光地
建築観光	「吊脚楼」など	村落, 自然観光地, テーマパーク
服装観光	「対襟」など服装, 「西蘭卡普」など織物	自然観光地, テーマパーク
飲食観光	「咂酒」などお酒, 「茶葉湯」など食べ物	自然観光地, テーマパーク
儀礼観光	結婚式など	自然観光地, テーマパーク
歌と踊り 観光	「龍船調」と「黄四姉」など民歌, 「摆手舞」と「毛古斯」などの踊り	村落, 自然観光地, テーマパーク
イベント 観光	「女兒会」と「牛王節」など	村落, 都市市内, 自然観光地, テーマパーク

出典：2016年9月の恩施市観光局での聞き取り調査資料により筆者作成

表1に見るように、恩施土家族の民族観光は、自然観光地とテーマパークが主で、そこで披露される土家族の婚姻習俗や民族歌と踊りは、特に「少数民族的」または「民族風情」がある民族文化として土家族の民族観光によく利用されている。特に、「女兒会」は、漢族にはない祝祭日であり、また漢族の伝統的な恋愛活動とも異なる。また、民族観光では、イベントが多く民族地域の重要な観光資源として取り入れられているほか、恋愛や婚姻に関する習俗もよく利用されているため、「女兒会」はその両方の特質をあわせ持つ観光資源として注目されている。さらに、「女兒会」は他の土家族地域にない湖北省の中心的な観光資源として観光開発されてきたため、湖北省恩施地域土家族の民族観光を大きく特徴づけるものとなっている。

3. 湖北省土家族の民族観光の事例：「女兒会」

3.1 「女兒会」の由来

恩施市の観光パンフレットによると、「女兒会」についての紹介が以下のように記されている。

「土家女兒会」は「東方情人節（東方のパレンタインデー）」または「土家情人節（土家族のパレンタインデー）」と呼ばれ、恩施地域を代表する伝統的な祝祭日の1つで、毎年旧暦7月7日から12日まで開催される。「土家女兒会」はかつての巴人の原始婚姻習俗の1つと考えられ、恩施土家族の青年男女が自発的に結婚相手を探すという目的のための祝祭日である。「土家女兒会」は恩施を「相親之都（お見合いの都）」、「恋愛之城（恋愛の町）」とみなしている〔恩施市旅遊局編2016〕。

また、現在、恩施市旅遊局が観光資源として利用している「土家女兒会」や「恩施土家女兒会」の前身は恩施市の石灰窯地域の「女兒会」と大山頂地域の「野老公会」¹³であるが、本稿では、資料の関係から石灰窯地域の「女兒会」について論じる。

13 毎年の旧暦5月21日と7月22日に、地域の人々は市場に行き、自由に恋愛活動に参加する。その恋愛活動の形は、市場でお互いに好意を持つ人同士が恋愛話をするほか、既婚者も参加できる。また、既婚者はその日に結婚する前の恋人と会うことが多かった。湖北省恩施市政協文史資料委員会編2005『恩施土家女兒会』中国文史出版社、pp.6-9。

石灰窯地域の「女兒会」については、これまで、詳細な歴史的文献資料がなく、唯一存在した民国期（1912年）の『黃氏日用雑誌』の原本が、1953年に、当時の「土地改革」政策により紛失した。この原本の謄写本¹⁴には「女兒会」に関する記述があり、「十個棚女兒会」の説明として、「普段、外出が禁止されている未婚の女の子は、この日に綺麗な服を着て市場に行く。お互いに好意を持つ人同士が夜まで恋愛話をする（未婚婦女理頭善粧，穿着一新，相邀趕場。結縁男女，趁此良機，相互瞥見。中意者，嫣然一笑，以為情願，約定交談，傾吐愛慕，至晚而歸）」と記されている〔政協恩施市文史資料工作委員会編1985: 184〕。

また、「女兒会」の発見者である齊書清¹⁵さんは、多くの現地調査と歴史資料に基づいて、「女兒会」について次のように述べる。

清朝末と民国期まで、恩施石灰窯地域では、「女兒会」は、毎年旧暦7月12日に、周辺地域の人々、特に若い人々が市場にやって来て、好きな相手を探す風俗であった。一般的には、未婚の女子が市場に行くのは珍しく、また、ちょうどその時期は地域の「月半節」¹⁶で、既婚の婦人も里帰りしているのので、その日、市場には女性が多く、ゆえに、「女兒会」という名称となった。また、「女兒会」は明朝末期から始まった。

「女兒会」は、正確な起源は不明であるが、開催時期は毎年旧暦の7月12日である。また、「女兒会」は、かつて恩施石灰窯地域の祝祭日の「月半節」で、自由恋愛で結婚相手を探す活動を指した。一般的に、女性は外出が禁止されているが、その日に限って、集会の重要参加者として結婚相手を探すこともできた。他の集会と比べ、その日はほとんど女性のための集会であるため「女兒会」と言うのである。「女兒会」は1995年に、全国的な民族観光ブームのなかで観光化されたが、それ以前は、前述のように恩施石灰窯地域の祝祭日であり、自由な恋愛活動を意味した。すなわち、1995年という年は中国政府が「民族観光」政策を大々的に打ち出し、その後の少数民族観光に大きな影響を与えたことから、中国の観光化の歴史を考える上で1つの大きな画期と見なすことができる。

よって、以下、「女兒会」の発展過程を2つの段階、すなわち、(1) 建国から観光開発の始まる1995年までと、(2) 1995年以降に分けて、「女兒会」の発展と地域エリートの関わりについて述べ、湖北省土家族の民族観光における民族文化の表象の一面を明らかにする。

3.2 建国以降から1995年までの「女兒会」

中国建国以降、一連の政治政策と「文化大革命」により、中国の民族文化は大きく変容した。中でも、建国以降から1978年の「改革開放」まで、多くの伝統習俗や民族文化が「封建的」「旧社会的」「旧弊打破」などの理由で政府により禁止され消滅した。しかし、「改革開放」以降に

14 1984年に謄写者齊書清さんが恩施市誌へ提出したが、現在その謄写本は行方不明である。

15 筆者は2017年6月に、93歳の齊書清さんに聞き取り調査を行った。齊さんは1953年の「女兒会」に参加して、現在の妻と恋愛になり、結婚に至った。また齊さんは、「女兒会」に関する重要人物であるため、これまで挙げられている「女兒会」に関する多くの研究などに参加している。

16 月半節は旧暦の7月12日であり、亡人を記念するための祭日である。

なると、逆に、それらの伝統習俗や民族文化を復活させようとする機運が高まった。さらに、全国的な経済発展を目指して市場経済への転換が行われ、少数民族地域においても地域経済の発展に向けて民族文化が重要な観光資源として観光開発に利用されるようになった。

そこで、以下において、建国から1995年までの期間をさらに、1) 建国以降から「改革開放」までと、2) 「改革開放」から1995年までという2つの時期に分けて、石灰窯村の人々の聞き取り調査資料から、「女兒会」の変化を見ていく¹⁷。

3.2.1. 建国以降から「改革開放」まで

・事例1 田さん（土家族、女性、60代、主婦）

私は1979年の「女兒会」で夫と恋愛関係になり、その2年後に結婚した。しかし、その時には「女兒会」という呼び方ではなく、「趕月半（ガンユエバン）」¹⁸と呼ばれた。「女兒会」は1960年代と1970年代初期にはそれほど重視されなかったもので、普通に市場の日として過ごしたが、1970年代後期から復活した。1970年代後期の「女兒会」の演目として、地域の体育大会（綱引きやバスケットボール）、舞台での歌や踊り（チャルメラなどの楽器演奏と「儺戯（ノオシ）」¹⁹）などがあった。また、その日の市場はお正月以外で一番賑やかであるため、周辺の村からも大勢参加した。17歳の時友達と一緒に「女兒会」の市場に行き、夫の共通の友人を通して夫と出会い、お互いに好意をもち、その後ずっと連絡して、最後に彼から求婚され、私の親の許可を得て結婚した。

・事例2 楊さん（漢族、男性、70代、農業）

私の若い頃やその前の1960年代にあった「女兒会」は、皆わざと「女兒会」とは言わず、「趕月半」という言い方が多かった。旧暦の7月12日になると市場に行き、買い物をする人もいるし、結婚相手を探す人もいる。それは、かつて「封建的な」習俗であったので、参加者も地域と周辺の人々であった。建国以降の1950年代初期に、郷政府は「女兒会」で物品の交換や売買を目的とした「物資交流大会」を2回開催し、そこで「儺戯」も披露された。その後、1961年から70年代末期までの「大躍進」²⁰政策と「文化大革命」などによって「女兒会」はしばらく禁止されたが、実際には毎年その日になると市場が立った。私はお見合いで妻と結婚した。

・事例3 鄧さん（土家族、男性、80代、農業）

建国以降、「女兒会」は建国前と同様、毎年「月半節」が開催されたが、周辺地域の人々もやってきた。その時期の「女兒会」には2つ重要な内容があった。その1つは、主に天麻など漢方薬や日用雑貨の売り場として、もう1つは、未婚の青年男女がその日に結婚相手を探す場としてだった。当時は、「女兒会」を通じて結婚相手を探した後、結婚に至った人もいたが、お見合い結婚が主流だった。その後、1950年代後期から1970年代初期まで、「女兒会」は毎年続い

17 筆者は2017年3月と6月に、村で「女兒会」について、10人ぐらいの人に聞き取り調査を行った。

18 石灰窯地域では旧暦の7月12日の月半節を祝い、市場に行く。

19 土家族の伝統的な祭祀などの機能をもつ宗教儀礼や演劇の1つである。

20 中央政府が1958年から1960年まで実施した生産政策であった。

だが、市場での商売が重要な内容であった。また、その間、郷政府は「女兒会」に反対の態度をとっていたが、人が多く集まることと、商売が重要な活動内容だったことから、「物資交流大会」として「女兒会」を2回主催した。私はお見合いで妻と結婚した。

以上をまとめると、「女兒会」は、従来石灰窯地域の1つの祝祭日である。しかし、当時、石灰窯地域の人々は「女兒会」とは呼ばず、「改革開放」まで「趕月半（ガンユエバン）」と呼んでいた（事例1，2，3）。その日は市が立ち、地元の人々が参加し、特に未婚の男女はこの日に自由に結婚相手を探すことができた。また、地域政府は、建国以降から「改革開放」まで、「女兒会」を政治的理由により禁止したが、「女兒会」の経済的機能を利用して、「女兒会」を「物資交流大会」という名称で2回主催した（事例2，3）。その内容は物品交流会であったが、娯楽として「儺戯（ノオシ）」も披露された。1970年代後期からは地域体育大会も開催されるようになった。一方、毎年の「女兒会」は「月半節」の祝祭日に市場を開設するという形で続いている。さらに、「女兒会」の婚恋機能も今日まで続いてきているが、当時は、それほど重要なものではなかった（事例2，3）。

3.2.2 「改革開放」から1995年まで

・事例1 田さん（土家族，女性，30代，自営業）

「女兒会」は私たちの地域にずっと前からある習俗で、子供の時に祖母から「女兒会」の話聞いたことがあり、よく参加した。しかし、「女兒会」という呼び方は1980年代頃から始まった。その前は「趕月半」と呼んでいた。1980年代から政府は「女兒会」を開催するようになった。「女兒会」には市場があり、地域の演劇や民族の歌や踊りなどがあるので楽しかった。地域の体育大会も1980年代ごろから始まった。その時の「女兒会」の参加者は、主に私の地域とその周辺地域の人々であった。「女兒会」で結婚相手を探すことできるのは知っていたが、やはり難しいと思う。80年代後期か90年代初期の頃から、「女兒会」は盛大化し、恩施市内からも観光客が来るようになった。今の「女兒会」は、地域で一番重要な祝祭日として、大人から子供まで楽しんでいる。私はお見合いで隣村の夫と結婚した。

・事例2 黄さん（土家族，男性，40代，自営業）

私は「女兒会」に何回も参加した。1980年代以降の「女兒会」は市場があり、歌や踊りなど地域の人々が演じるものが毎年あった。「女兒会」で結婚相手を探すことできるのは知っていたが、難しいと思う。私の周りでは、こういう経験者は少数だ。80年代から90年代までの村の「女兒会」は賑やかで、参加者が多く、その内容も豊かであった。「女兒会」の開催期間中、町の店や屋台などの売上げがすごくよかった。また、「女兒会」での物品交流販売は漢方薬が中心であった。私の妻は親戚から紹介され、お見合いで結婚した。

・事例3 覃さん（土家族，男性，50代，公務員）

「改革開放」後、「女兒会」は復活した。また「女兒会」という呼び方も、1980年代から地域で呼ばれている。地域特産品など物品交流販売以外、地域体育大会や民族歌などを披露する

ショーも始まった。「女兒会」は、結婚相手を探すという婚姻習俗の機能だけでなく、「女兒会」の期間中に周辺や他地域から多くの人々がやって来て、地域経済の発展にとっても重要なものだった。特に私たちの地域は、天麻など漢方薬が有名であり、またちょうど「女兒会」の時はその漢方薬が旬であるため、多くの薬関係者が村まで漢方薬を買いに来た。80年代から90年代まで、一般的にはお見合い結婚が多かったが、私たちの地域では「女兒会」に参加して好きな人を探し、結婚するという話はよくある話だった。さらに、政府は主催者として、国家の政策、特に民族政策や農業政策などに関する宣伝も、「女兒会」を利用して地域の人々に伝えている。私の妻は同じ学校の出身で、恋愛結婚である。

以上、「改革開放」以降1995年までの間に、「女兒会」は石灰窯地域で復活し、一番盛大な集会になっている。また、地域特産品の販売などの経済活動は「女兒会」の重要な内容になっている（事例1, 2, 3）。事例1と3から、「女兒会」という呼び方はその時期から次第に広まったことがわかる。また地域政府は「女兒会」の集客力を利用し、国家政策などの政治宣伝の場に利用しただけでなく、「女兒会」の内容を増やした。「女兒会」は、従来の村落の経済交流活動の自然な集会である「趕月半」から、地域政府が主催して多くの機能を併せ持つ重要な地域祝祭日になった。

次に、1995年は、前述のように、中国政府の民族観光政策により、少数民族観光にとって大きな変化の年であるので、以下、1995年以降の「女兒会」について詳しくみていこう。

3.3 1995年以降の「女兒会」

1995年以降の「女兒会」は、全国的な民族観光政策に基づいて、恩施地域の重要な観光資源として開発され、石灰窯地域から恩施市、そして恩施市内の観光地へと移植されてきたが、石灰窯地域では現在まで毎年続けて「女兒会」を開催している。以下は、1995年以降の石灰窯地域の「女兒会」の様子である。

・事例1 祝さん（苗族、女性、30代、主婦）

1990年代後期、「女兒会」は賑やかであった。特に1995年以降「女兒会」は恩施州やその周辺地域で有名になり、観光客も多くの地域から来ている。恩施市内から石灰窯村まで車で5時間ぐらいかかる上に、当時、村にはホテルが少なかったが、毎年観光客の数は多かった。「女兒会」は恩施市と恩施市内の観光地でも開催されたため広く知られるようになった。その時期から、地域の人々、特に若者は「女兒会」という呼び方に慣れ、かつての「趕月半」という呼称は忘れられていった。また、その時期の「女兒会」は、地域の演劇と民族の歌や踊りの披露、つまり、舞台公演がその重要な内容であった。地域特産品交流会と地域体育大会は毎年続いているが、政府は「女兒会」で好きな人を探すという伝統習俗にも注目し、1990年代後期から話題になったりしたが、多くの若者が都市へ出稼ぎに出て、インターネットの利用が普及するとともに、結婚相手を探す方法も多くなり、かつてのように、「女兒会」でわざわざ結婚相手を探すこともなくなった。私は恋愛結婚である。

・事例2 樊さん（土家族、女性、40代、公務員）

1995年に「女兒会」が恩施市市内で初めて開催されて以来、ずっと続いている。当時、石灰窯地域の人たちは皆喜んだ。自分たちの地域の習俗が重視され、さらに恩施市内にも移植されたのは、地域の誇りであった。また、1995年以降の「女兒会」は地域の一番盛大な集会として、民族文化の展示（民族歌と踊りや演劇「儺戲」の披露）が重視されているほか、「女兒会」の焦点も、地域特産品の商業交流から民族文化の展示へと移行し、「女兒会」の恋愛習俗もだんだん重視されつつある。地域の体育大会も続いている。1995年以降、「女兒会」の参加者は、観光客の数が多くなり、地域の道路などの基盤整備やホテルなどのサービス業も発展している。

以上の事例から、1995年以降の「女兒会」は、民族観光という全国的な国家政策の下で、恩施地域の少数民族の文化資源として観光開発され、恩施市内などで開催されている一方、その発祥地である石灰窯地域でも毎年続いている（事例1, 2, 3）。また、民族観光の関心も、それまでの経済交流から地域文化や民族文化の展示へと変わりつつある。さらに、「女兒会」の観光客の増加により、道路、レストラン、ホテル等の地域の観光インフラの整備にもつながっている（事例3）。

3.4 文献資料等からみた石灰窯地域の「女兒会」の変遷

次に、文献資料から、建国以降1995年までの石灰窯地域の「女兒会」の内容について見ていこう。ここでは、『恩施土家女兒会』（2005）と『恩施市郷鎮街道誌叢書・紅土郷誌卷』（2011）、『恩施土家女兒会演変掲密』（2009）の3つの文献と、恩施州政府のホームページ（2017年6月28日参照）に掲載された資料をもとに、表2, 3, 4にまとめると以下ようになる。

表2 1995年までの「女兒会」の活動年表

年間	テーマ	主催者	活動内容
1949～1957年：建国初期の「女兒会」の状況は不明	なし	なし	市場、自由に好きな相手を探す
1958年	物質交流会	石灰窯郷政府	市場
1959～1978年：政策により禁止、実際には開催された	なし	なし	市場、自由に好きな相手を探す
1979年の「改革開放」以降、復活した	なし	郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演、体育大会（市場、自由に好きな相手を探す）
1984年：恩施州が自治州になった後	第1回石灰窯女兒会	恩施市政協と郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演（市場、自由に好きな相手を探す）
1985年	なし	郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演（市場、自由に好きな相手を探す）
1986年	1986石灰窯女兒会	恩施市市政府、郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演、民間での文化の展示、「女兒会」の歴史等の宣伝、歌垣（市場、自由に好きな相手を探す）

1987年	なし		
1989年	1989石 灰窯女 児会	恩施市 市政府, 石灰窯 区政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演, 民間文化の展 示, 体育大会, 「女児会」をテーマとして文 章, 書道と絵のコンテスト(市場, 自由に好 きな相手を探す)
1993年	1993石 灰窯女 児会	恩施市 市政府, 石灰窯 区政府	歌と舞踊など文芸演劇の公演, 民間文化の展 示, 体育大会(市場, 自由に好きな相手を探 す)

出典：2005『恩施土家女児会』と『恩施市郷鎮街道誌叢書・紅土郷誌巻』より筆者作成

表2にみるように, 建国初期に, 「女児会」は政府が主催者として「物資交流大会」を2回開催した。その後, 1960年代から「改革開放」まで「女児会」は中止され, 再開されたのは「改革開放」以降であった。他方, 建国初期の地域政府は, 「女児会」を地域経済の発展に利用して, その経済的機能を重視していたが, 「改革開放」以降1995年までの間, 政府はその経済的機能に加えて, 集会的機能に注目するようになり, その場を利用して国家政策の政治宣伝と地域体育大会などを行うようになった。その他にも, 「改革開放」以降, 国家の文化保護発展政策により地域政府は民族文化を重視するようになったため, 「女児会」の期間中に民族および地域文化の展示が盛んに行なわれるようになった。

次に, 1995年以降の恩施市における「女児会」の観光開発過程についてみていこう。

表3 「女児会」に関する重要な観光活動

年	観光活動内容
1995年	初めて恩施市内で開催された。
1999年	初めて恩施地域内の自然観光地「龍麟宮」で開催された。
2000年	2000年, 「恩施土家女児会」と改称し, 「女児会」は恩施州の4つの祝祭日の1つと指定された(他の3つは, 「恩施州州慶節」, 「牛王節」, 「摆手舞節」)。
2005年	「女児会」という観光ブランド商標が国家商標名簿に登録された。 「土家女児会」のMTV(宣伝広告ビデオ)が作成された。
2006年	石灰窯村で民間組織の「女児会伝承保護協会」が設立された。 恩施州と恩施市の最初の「非物質文化遺産(無形文化財)」として登録された。
2007年	湖北省民族事務委員会は「恩施土家女児会研究」を研究課題として出した。 「恩施土家女児会」は恩施市の3つの観光目玉の1つになった(他の2つは, 「恩施大峽谷風景区」と「恩施玉露茶」)。
2008年	湖北省の文化観光祝祭日になった。
2009年	「恩施土家女児会」は, 民俗類の「非物質文化遺産(無形文化財)」として, 「湖北省第二批省級非物質文化遺産名録」に登録された。
2010年	「女児会」のホームページ(http://www.nuerhui.com)が創設された。
2011年	「女児会」の舞台劇「嗯嘎・女児会」が創作された。
2012年	「女児会」を基に創作された28万字に及ぶ長編小説『女児会』が出版された。
2013年	「女児会」を基に, 恩施市内でテーマパーク「土家女児城」が建立された。

出典：恩施州のホームページ：<http://www.hbenshi.gov.cn> (2017年6月28日参照)より筆者作成

表3によると、「女兒会」の観光開発は1995年から始まり、2000年以降に発展していった。特に、政府は「女兒会」を地域の祝祭日とし、地域の観光ブランドにするなど、「女兒会」は恩施市および恩施州の観光開発の重要な観光資源となった。

また、2006年には民間組織「女兒会伝承保護協会」が設置され、「女兒会」は恩施市と恩施州、湖北省の無形文化財リストに登録された。さらに、「女兒会」をテーマにした文学作品や舞台劇など芸術作品の創作とテーマパークの建立は、「女兒会」を広く宣伝する一方、政府も「女兒会」に関する研究を重視した。「女兒会」の知名度が向上することによって、「女兒会」は地域また民族の重要な文化の1つとして扱われるようになった。

表4 1995年から2016年までの「女兒会」開催内容一覧

年	テーマ	主催者	開催地
1995	1995年湖北民俗風情遊覧恩施土家族女兒会活動	湖北省政府と恩施市政府	恩施市内
1996	1996年恩施土家女兒会	恩施市政府	恩施市内
1999	1999年龍麟宮女兒会	恩施市政府	龍麟宮自然観光地
2000	2000年中国首届清江瀾灘節閉幕式暨2000年女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然観光地
2001	2001年恩施土家女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然観光地
2002	2002年恩施土家女兒会	恩施市政府, 梭布垭石林風景發展株式会社	梭布垭石林自然観光地
2003	2003年恩施土家女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然観光地
2004	首届魔芋節暨2004年恩施土家女兒会	恩施市政府	恩施市内
2005	2005年恩施土家女兒会	紅土郷政府と梭布垭石林風景区開発会社	石灰窑村, 梭布垭石林自然観光地
2006	2006年恩施土家女兒会	恩施市政府, 紅土郷政府と梭布垭石林風景区開発会社	石灰窑村, 梭布垭石林自然観光地
2007	走進恩施州・相伴女兒会	恩施市政府と梭布垭石林風景区開発会社	恩施市内と梭布垭石林自然観光地
2008	2008年恩施土家女兒会	恩施市政府, 福星城不動産会社, 恩施和声走商貿会社	恩施市内
2009	2009年恩施土家女兒会	恩施市政府, 恩施市市委員会	恩施市内
2010	2010年恩施土家女兒会	恩施市政府, 恩施市市委員会	恩施市内
2011	2011年恩施土家女兒会	恩施市政府, 恩施市市委員会	恩施市内
2012	第三届湖北・恩施生態文化旅遊節暨2012恩施土家族女兒会 相約晒都女兒会・情定土家情人節	恩施市政府, 恩施市市委員会	恩施市内
2013	第四届湖北・恩施生態文化旅遊節暨2013恩施土家族女兒会	恩施市政府, 恩施市市委員会	恩施市内

2014	2014恩施土家族女兒会 東方情人節・土家女兒会	恩施市政府, 恩施市市 委員会	恩施市内, 土家女兒城
2015	2015恩施土家族女兒会 走進恩施大峽谷・相約土家女兒会	恩施市政府, 恩施市市 委員会	恩施大峽谷自然觀光地
2016	2016恩施土家族女兒会 恋上梭布垭・愛在女兒会	恩施市政府, 恩施市市 委員会	梭布垭石林自然觀光地

出典：2009年『恩施土家女兒会演變揭密』と恩施州のホームページ：
<http://www.hbenshi.gov.cn> (2017年6月28日参照) より筆者作成

表4によると、1995年以降「女兒会」は毎年新しいテーマで開催された。またテーマの多くは、その年の開催地名が組み込まれ、恩施市政府と恩施市観光会社は、「女兒会」の開催を通して、恩施市の観光地を宣伝した。また、恩施市は、その開催地を1995年の恩施市区から、1999年には恩施市の自然観光地へ移し、2013年には恩施市のテーマパークでも開催するなど、「女兒会」は地域政府と観光会社にとって、地域の重要な観光資源として利用された。

また、以上の表3、4から、1995年以降、「女兒会」は湖北省政府と恩施市政府から注目され、特にその恋愛機能が注目されていることがわかる。こうした全国的な民族観光開発の背景には、「女兒会」が、元来、恩施農村地域の祝祭日や習俗であったものが、恩施州政府によって注目され、民族文化や地域祝祭日の1つとして1995年に都市部へ移植されたことと、2000年に、恩施市の3つ観光重要項目の1つとして州内の各観光地（「梭布垭石林」など）で観光に用いられたということがある。2007年には恩施州の3つ観光名物の1つになった。2008年から実施された湖北省の観光政策「鄂西生態文化旅遊圈」²¹では、「女兒会」を恩施地域の一番重要な民族観光資源として利用することになった。2011年に恩施市地域発展政策「3都建設」²²において、「女兒会」に基づいた「中国相親之都（お見合いの都）」が建設された。そして、「女兒会」が恩施市内や恩施自治州内の有名な観光地で開催されるようになり、また、2013年に建造された土家族の民族テーマパーク「土家女兒城」においても重要なイベントとして開催されてきた。

表3と表4からわかるように、「女兒会」は恩施地域の重要な観光資源となり、恩施地域や湖北省の民族観光において重要な役割を果たしている。その所有権もかつての石灰窯村の郷政府から、恩施市政府へ移っている。また、近年、観光会社の「女兒会」に関するイベントも重要になりつつある。さらに、「女兒会」が地域の共有文化資源となったため、2015年と2016年の「女兒会」は、恩施大峽谷自然観光地と梭布垭石林自然観光地のほかに、テーマパークの「土家女兒城」でも開催されている。一方、石灰窯村でも、1995年以降、毎年「女兒会」を開催しているが、地理的悪条件などの理由により観光化はそれほど進んでいない。

また、石灰窯地域の「女兒会」(写真1、2、3参照)と恩施市内やテーマパーク(写真4、5、

21 恩施州を中心として、その自然環境と少数民族文化を利用して、恩施州またその周辺地域の観光を發展させる政策である。

22 恩施州政府と恩施市政府が2008年から実施した、恩施市を「中国相親之都（中国のお見合いの都）」「世界晒都（世界中の晒の都）」と「中国老年生態休閒養身之都（中国の老年生態の都）」にするための地域発展政策である。

6参照)における「女兒会」を比較してみると、いずれの地域でも民族歌や踊りが中心であることがわかるが、石灰窯地域に特徴的なのが、地域体育大会や医療チームによる無料の診療が民族文化の展示とセットになっていることである。一方、恩施市内と観光地での「女兒会」はお見合い活動が大きな特徴になっている。また、その開催期間について、石灰窯地域での「女兒会」は1日間であるのに対し、恩施市内と観光地での「女兒会」は数日間開催されている。さらに、その参加者について、石灰窯地域の参加者は地元の人々が多いのに対し、恩施市内と観光地は恩施州内外からの観光客が多い。

また、石灰窯地域での「女兒会」は、紅土郷政府、石灰窯村委員会と「女兒会伝承協会」によって決まるが、恩施市内と観光地での「女兒会」は恩施市政府と観光会社で決める。しかし、いずれの「女兒会」にも地域エリートが参与した。民族文化の観光開発は国家の政策や政治的要因と密接につながっている一方、個々の地域政府は国家の政策という大枠の下で、個別の地域や民族の実情に応じた政策を行っている。その際、重要な働きをするのが地域エリートである。彼らは地域政府の下で、地域や民族文化の保護や伝承、宣伝など多様な取り組みを行ってきた。恩施地域の「女兒会」の民族観光においても、地域エリートとの関わりが重要となる。以下では、この地域エリートと「女兒会」の関係についてみていこう。



写真1 (左) 1980年代の石灰窯地域の「女兒会」の開催場所 (2017年8月筆者撮影)



写真2 (右) 現在の石灰窯地域の「女兒会」の開催場所 (2017年8月筆者撮影)



写真3 (左) 石灰窯地域の「女兒会」での「儺戲」の舞台道具の展示 (2017年8月筆者撮影)



写真4 (右) 恩施市のテーマパークの「女兒会」 (2017年8月筆者撮影)



写真5 (左) テーマパークの「女兒会」での民族舞踊 (2017年8月筆者撮影)

写真6 (右) テーマパークの「女兒会」での恋愛活動 (2017年8月筆者撮影)

4. 「女兒会」と地域エリート

これまで、「女兒会」の伝承やその観光開発に、地域エリートが多く関わってきた。地域エリートは、(1) 少数民族幹部、(2) 地域の知識人、(3) 地域の企業家、(4) 民族文化の伝承人という4つのタイプに分類でき、そのいずれのタイプも、石灰窯地域と恩施地域のエリートに見られる。以下は、「女兒会」と地域エリートの関わりについて調査事例からみていこう。

(1) 少数民族幹部

事例1：齊書清さん

齊書清さんは恩施州建始県の苗族出身で、1952年から石灰窯郷政府で仕事をするようになった。齊さんは1950年に、石灰窯郷の「女兒会」の話を知ったことがあった。そして1952年に石灰窯郷へ転勤した後、地域の人々と「女兒会」の話の信憑性を確認し、地域政府に報告した。しかし、建国初期には、国家の経済的、政治的理由などで「女兒会」が禁止された。また齊さんは1952年に、政府の事務室で民間から収集した文化資料を整理していたところ、「女兒会」に関する文章を載せている『黃氏日用雑誌』という本を見つけた。しかし、この本は、当時の文化運動により紛失したため、「女兒会」に関しては、一切の文字資料が失われてしまった。さらに、齊さん本人も、「女兒会」の関係者として2回も政治的迫害にあった。1995年以降、恩施州で民族観光が始まった当初、「女兒会」を地域観光資源として開発する最初の段階において、政府側や民族文化伝承人、地域の知識人などと一緒に「女兒会」の歴史を明らかにし、その開催形式と活動内容について決めるなど、「女兒会」の観光開発に尽力した。

1979年に、「撥乱反正」政策があり、私は「女兒会」に関して文章や本を書くことを再開し、多くの民族文化学者と政府の人々が私のところで「女兒会」に関していろいろ確認してきた。1980年代に、「改革開放」政策により、地域政府は、地域経済の発展のため「女兒会」の経済的効果を重視するようになり、また伝統文化の伝承や保護に関する文化的政策も復活され、「女兒会」は地域政府によって開催されることになった。私はその「女兒会」の開催に関して多くの仕事をした。例えば、「女兒会」に関して雑誌などで文章を発表したり、地域文化に関する政府の会議で、「女兒会」についてその伝承や保護などを提案した。1995年以来、恩施市内や

他の観光地で「女兒会」が開催されるようになったが、「女兒会」の観光開発には、私も政府と観光会社の会議に参加して、その開催方法などについて提案した。例えば地域特産品交流会や歌垣でのお見合い活動などである。また、政府と観光会社は私から「女兒会」に関する伝説や逸話などを聴き、民族文化の宣伝や「女兒会」の観光活動に利用した。

事例2：楊光富さん

楊さんは恩施市芭蕉郷の土家族出身である。1976年に恩施市財政局から石灰窯地域へ転職になり、政府で文化の宣伝に関する仕事をするようになった。楊さんは、地域の知識人あるいは地域出身者として、1980年代初期に「女兒会」が復活して以降、「女兒会」の発展のため多くの活動を行った。2006年から、「女兒会伝承協会」²³の副会長になり、その後2010年から2015年まで会長を務めた。また、近年の石灰窯地域の「女兒会」に関しても、活動計画や内容などの面で多くの貢献をした。

私が「女兒会」に関することを始めたのは1980年代初期からであった。その時期は、「改革開放」が始まったばかりで、「女兒会」を地域の重要な文化として復活するため、「女兒会」は政府が主催者となって開催された。そして、「女兒会」の開催などに関して多くの人材を必要としたため、私も誘われた。当時、私が誘われた理由としては、私が石灰窯で文化宣伝に関する仕事をずっとして、地域文化に詳しくあったからだ。それをきっかけとして、地域で「女兒会」の歴史などについて当時の高齢者から多くの聞き取り調査をして記述した。その後、私はそれら調査資料などに基づいて、「女兒会」の由来について、「十個棚女兒会」²⁴という舞台劇の劇本を書いた。その舞台劇は毎年石灰窯地域の「女兒会」で公演していて、「女兒会」の定番になっている。これまで30年間、私は地域の「女兒会」に全部参加して、現在も「女兒会」の新しい舞台劇の脚本を書いている。2006年から「女兒会伝承保護協会」の副会長であった。会長の時、その仕事内容を2つに分け、1つは宣伝活動であった。例えば、外部の人（観光客、研究者など）が「女兒会」の研究や観光に来た時、私は「女兒会」の歴史、由来、その内容などについて彼らに教え、またテレビ局や雑誌などのメディアが「女兒会」について取材に来た時は、その宣伝用資料を準備した。もう1つは、毎年の「女兒会」の開催について、地域政府と協力して、その内容について計画し準備することであった。例えば、「女兒会」の開催資金の準備や、「女兒会」イベント時での司会役や、民族歌や舞踊、舞台劇での役割の分担などであった。

23 恩施地域民族文化復興の民間組織の1つである。その組織は2006年に成立し、最初は会員数100人であったが、2017年は60人で、その多くは石灰窯地域と恩施市内の地域企業家、民族幹部、地域の知識人である。年会費は100円で、その活動内容は、毎年政府に協力して「女兒会」を開催すること、毎年の「女兒会」の活動内容を決めること、「女兒会」に関する宣伝などである。

24 石灰窯地域の民国時期前の旧称は「十個棚」であったので、楊光富さんはその地名を使って、舞台劇の名称にした。

事例3：李輝軒さん（石灰窯地域の黄さん、田さんなどからの聞き取り資料より）

李輝軒さんは石灰窯村出身の土家族で、恩施州の第一人者、州長として石灰窯地域の人々の誇りである。李輝軒さんは恩施州政府副州長の田寿延さんなど何十人かの少数民族幹部を連れて、1984年の石灰窯での「女兒会」に参加した。彼らの石灰窯「女兒会」への旅は、周辺地域の人々にも注目され、たくさんの方が石灰窯の「女兒会」に参加しに行ったので、その「女兒会」は大盛況だった。恩施州と湖北省の新聞がこのことについて報道したことから、当時石灰窯の「女兒会」は恩施州やその周辺地域で有名になった。

また、李輝軒さんは、「女兒会」について、「『女兒会』の起源地は石灰窯であるが、恩施土家族の人々の特別な恋愛文化の1つである。地域文化の宝物として重視しないとイケない」と評価した²⁵。それ以降、恩施州政府は「女兒会」に注目するようになり、「『女兒会』工作小組（「女兒会」プロジェクトチーム）」を立ち上げ、「女兒会」に関する現地調査や歴史文献調査、保護活動が始まった。さらに、恩施州政府は、恩施市内から石灰窯までの道路などの基盤整備に資金を投入したので、石灰窯は周辺地域と比べて大いに発展し、またその発展の理由として、「石灰窯は州長の出身地であるため発展することができた」と地域の人々に思われている。

事例4：崔在輝さん

崔在輝さんは恩施出身の土家族で、恩施市政協文史委員会の主任であった。また1995年以前、恩施市政府が「女兒会」に関する文化保護活動を開始する際、重要な責任者であった。2005年に、所属する恩施市政協文史委員会と恩施市民族宗教局から『恩施土家女兒会』²⁶という本の出版に関わった。さらに、「女兒会」が1995年に観光化されて以降、観光資源としてその開催や宣伝などに深く関わってきた。

1995年以前に、私は「女兒会」の歴史などを明らかにするため、仕事場の同僚と何人かの地域の知識人と一緒に何度も石灰窯に行って現地調査をした。「女兒会」について、100人ぐらいにインタビューをした。1995年以降、国家の民族観光政策に応じて「女兒会」は観光開発され、私たちもその開催形式と場所などについて何度も協議し、雲南省へも見学に行って、その民族観光の形式の1つ、つまりイベント観光を参考にした。1999年以降、「女兒会」を市内の町から観光地へ移したのも、雲南省タイ族の「澆水節」を参考にしてのことだった。また、「女兒会」の特徴、つまりその市場としての機能と自由恋愛の機能を発揮するため、お見合い会場で地域物産交流会を開催するというのは従来の「女兒会」の場合と同じである。さらに、恩施が土家族地域という地域の特徴を打ち出し、その位置づけを明示するため、土家族に関する多くの文化習俗や資料が「女兒会」で展示されている。

事例5：田發剛さん

田發剛さんは恩施州巴東県の土家族出身で、定年前は恩施州民族宗教局の副主任であった。

25 「村委會」（村の委員会）の職員、黄さんの聞き取り調査から。

26 「女兒会」の歴史や発展状況などについて紹介した。

また、恩施州の伝統地域文化や民族文化、その伝承人の保護活動に多くの貢献をしたので、定年後は「恩施州民族民間文化保護与発展促進会」と「恩施州民間文芸家協会」の会長の地位にある。崔在輝さんと齊書清さんによると、田発剛さんは「女兒会」について早くから注目し、特に「女兒会」の伝承や観光開発、宣伝に尽力した。例えば、彼は多くの民族文化の保護や伝承などに関する会議で、恩施地域や「女兒会」について紹介したり、また地域の代表的な知識人として「女兒会」に関する活動に参加している。さらに、「女兒会」について文学作品も書いたりしている。また、1995年に「女兒会」を恩施市で開催した時に、「東方文芸匯演」という土家族の婚姻習俗文化を披露するにあたって、多くの提案をした。そして、「女兒会」こそが土家族の文化であるという観点を、多くの会議や文化活動などで表明した。崔在輝さんは、田発剛さんのことを「地域の有名な文化人であり、地域に対して愛情を持っている」と評価している。

(2) 地域知識人

事例6：雷翔さん

雷翔さんは恩施地域の土家族出身であり、定年前は湖北省民族学院民族研究所所長であり教授であった。

1980年代に、私は研究のため石灰窯地域で現地調査を行ったが、「女兒会」に関する文献資料はほとんど見つけることができなかった。1995年に、「女兒会」を恩施地域の代表的な民族文化として観光展示するための会議で、1980年代に復活した「女兒会」の信憑性について多くの議論がなされた。石灰窯地域の人々は皆「女兒会」について知っていて、それが自発的に行われてきたこと、その後、政府も参加して、その名称の変更や発展方向の指導がなされたが、「女兒会」が地域の習俗という特徴は変わっていないことなどから、「女兒会」は石灰窯の従来からの祝祭日の1つであることに間違いない。さらに、恩施市石灰窯地域の住民の多くは土家族であるため、「女兒会」を土家族の文化として考えるのは自然である。また、土家族文化といっても、恩施という地域性を考えるのも重要である。こうしたことを踏まえて、恩施州政府は観光宣伝と地域のアピールのため、「女兒会」の名称を「恩施土家女兒会」へ変更した。

事例7：呂金華さん

呂金華さんは恩施地域の土家族出身であり、現在、恩施市政府の税関部門で仕事をしながら、2008年に創刊した『女兒会』という季刊雑誌の編集責任者であり、恩施市作家協会の主席でもある。

「女兒会」の影響を強めるため、恩施市政府は恩施作家協会に依頼して、「女兒会」をテーマにした文学作品を募集した。同時に、多くの人が恩施にしかない「女兒会」に関する小説や詩などを書くようになったので、地域文学を発展させるために『女兒会』という季刊雑誌を創刊した。

「女兒会」は恩施地域独特の習俗であるが、その一番残念なことは、それに関する歴史文献

資料があまりなく、時々民俗学者などが「女兒会」は「偽民俗」だと主張する。だから私たちは地域文化を保護するため、『「女兒会」検討会』という論壇を何回か開催し、多くの地域知識人が、「女兒会」に関する現地でのインタビューや地域の歌謡などの研究を通してその歴史と発展状況を明らかにし、「女兒会」の存在を証明しようとしてきた。論壇においても、観光開発以降の「女兒会」について、その観光発展の方法と問題点や保護などについて議論がなされてきた。

事例 8：賀孝貴さん

賀孝貴さんは恩施地域の漢族出身である。定年前は、恩施市文化局と恩施市宣伝局など文化関連部門で仕事をした。定年後は、地域および民族文化に関心をもち、地域政府の依頼に応じて、文化の保護や伝承などに関することをしている。

私が最初に「女兒会」と接触したのは1995年であった。1995年に、湖北省と恩施州政府は民族観光開発を実践することになったが、私たちの地域が土家族苗族自治州であり、土家族が多く、また「女兒会」という祝祭日がほかの土家族地域になかったため、恩施州と恩施市政府の民族、旅遊、文化など関連する部門の会議を経た後、恩施州の民族観光を「女兒会」を中心に行なうことに決定した。その理由としては、当時、会議に参加した民族幹部や地域知識人が、「女兒会」が単に民族の祝祭日だけでなく、地域経済発展と民族文化展示の両方に利用できる文化であることを挙げた。その当時、民族観光においては地域の経済発展が一番重要な目標であった。また、「文化搭台、経済唱戲」、つまり文化と経済の両方の発展が目標であるという社会背景においては、「女兒会」はその目標を実現するのに適した文化であった。また、私は仕事の関係で、1995年から2013年まで恩施市内などで開催され「女兒会」に参加した。当時私は政府の文化部門の管理職だったので、「女兒会」に対して自分なりに多くの提案をした。特に、1999年から観光地で「女兒会」を開催することは、観光地の観光開発の強化につながった。1995年以降恩施市内で毎年「女兒会」を開催した。また1999年の「女兒会」を恩施の自然観光地「龍鱗宮」で開催したのは、当時、「龍鱗宮」は恩施市の有名な観光地であり、観光客が多かったからだ。定年後、観光会社や政府は「女兒会」を開催する前に、毎年、私と民族文化に詳しい人々を誘い、「女兒会」の活動内容などを相談するようになった。私たちは「女兒会」で展示する民族文化の内容について提案したりした。

(3) 地域企業家

事例 9：黄煥然さん

黄煥然さん石灰窯村の土家族出身で、農産品と煤炭などの会社の経営者である。黄さんは1990年代から運送業の営業をして、2000年以降会社を経営するようになった。地元の有名な企業家である。また、黄さんは地域のことに熱心で、2006年から「女兒会伝承協会」に参加し、2016年に会長候補者になり、2017年会長になった。

私は1990年以降毎年、石灰窯地域の「女兒会」に参加している。2000年まで、毎年地域体育

大会の主催と、「女兒会」の公演参加者の招待などを担当した。2000年になると、「女兒会」がますます盛大になり、私の会社が毎年「女兒会」の活動費用の一部を提供している。また、「女兒会伝承協会」では、石灰窯地域の「女兒会」についての宣伝や協会の活動に参加している。2017年に会長になって、その会員数を増やすことと、石灰窯地域の「女兒会」に関する観光宣伝などに頑張っている。

事例10：郭輝さん²⁷

郭輝さんは恩施出身者で、出身民族は不明である。現在、恩施州では有名な会社「華碩集団」の経営者である。また、「華碩集団」は2013年から恩施市土家族テーマパーク「土家女兒城」を運営している会社である。

2010年恩施州と恩施市政府は「女兒会」および恩施市の観光開発を強化するため、恩施市内で「女兒会」文化に基づいた土家族を中心としたテーマパークを建立する計画があった。郭輝さんはずっと観光産業に興味があり、また郭さんの会社は恩施市政府の重要な納税者であるため、恩施市政府と郭さんの会社が一緒にそのテーマパークを建立することが恩施州政府によって認可された。そのテーマパークは、その展示文化を「女兒会」および土家族を中心に構成しているため、「土家女兒城」と命名され、土家族文化に独特の婚姻習俗が展示された。また、毎年「女兒会」の開催場所の1つにもなっている。郭輝さんは毎年「女兒会」を開催する前に、恩施地域の知識人や民族文化伝承人などから「女兒会」の開催内容などに関する意見を聴いて参考にしている。特に、「女兒会」で好きな人を探することができるという点に注目し、「土家女兒城」の宣伝用語を「恋愛之城、相親之都（恋愛の聖地）」にした。2013年以降2017年まで、「土家女兒城」での「女兒会」のお見合い活動は恩施市内と観光客の間で一種のブームになった。

(4) 民族文化の伝承人

事例11：鄧玉書さん

鄧玉書さんは石灰窯村の土家族出身で農業を営む。鄧さんは「儺戲」の表現者として、2010年ごろから湖北省の「省級非物質文化伝承人」（湖北省の無形文化財の伝承人）に指定されており、「非物質文化」＝「儺戲」演出・創造において優れた熟練者である。また、鄧玉書さんは「改革開放」以降に「女兒会」が再開されて以来、毎回「女兒会」で「儺戲」を演じた。5年前、高齢を理由に出演することはやめたが、「儺戲」の演出監督は今でもしている。

私の「儺戲」は父から教えてもらった。今私たちが演じている「儺戲」の脚本も、その多くは、父から教えてもらったものである。恩施州には、「儺戲」と言えば、私たちの地域にしかない。私は「女兒会」で「儺戲」を演じてきてもう30年経った。1980年代の第1回目の「女兒会」の時に、郷政府が「女兒会」の関心を高め民族文化を表現するため、私たちを招待した。「儺戲」のその独創性と娯楽性のゆえに、大いに歓迎され、その後毎年「女兒会」に参加する

27 郭輝さんに関する情報と彼の「女兒会」との関わりについては、賀孝貴さんと崔在輝さんから聞いた。

ことが固定している。また、毎年演じている「儼戲」の内容が違っているが、それはみんなが良く知っている話、例えば「孟姜女哭長城」などであった。いま、私の「儼戲」チームはもう40年の歴史があるが、12人のメンバーからなっている。「女兒会」には、私たちの「儼戲」や、他の地域の人々の自発的参加があり、また皆無償である。これからも「女兒会」に私たちの「儼戲」チームはずっと参加すると思う。

事例12：魏清国さん

魏清国さんは石灰窯地域の土家族出身であり、農業を営む。魏さんは石灰窯地域の「女兒会」の重要な民族文化展示の1つである有名な「儼戲」の重要な表現者として、恩施州政府から「恩施州儼戲传承人」に指定されている。

私の「儼戲」は祖父から教えてもらい、18歳から正式に行っている。私はチームと一緒に、1990年頃から「女兒会」に参加して、「儼戲」を披露している。私は、よくほかの「儼戲」ができる人と一緒にチームをつくり、村の人々の家で祭祀などの活動も行っている。また、チームに12人いるが、年配者が多く、彼らもよく「儼戲」を教えてくれた。また、「女兒会」での「儼戲」の披露は無料でやっている。チームの皆は「女兒会」の場を借りて「儼戲」の魅力を伝えたいと考えている。

以上に述べてきた事例の12人の地域エリートについて整理すると、12人のうち1人は苗族出身で、1人は漢族出身、残りはすべて土家族出身であった。また、そのうち行政幹部は5人で、その内訳は恩施州政府2名、恩施市政府の幹部が1名、恩施郷政府の幹部が2名であった。そして、地域知識人3名のうち1人はかつての民族幹部、1人は大学教授、1人は普通の公務員であり作家である。また、地域企業家2名は、石灰窯企業家と恩施市企業家であった。さらに、農民の民族文化传承人が2名である。

2名の州政府幹部の中で1人は「女兒会」発祥の地石灰窯村の出身で恩施州政府の州長にまでなった人物で、州政府が「女兒会」に注目するきっかけを作った人である。また、もう1人の幹部は、「恩施州民族文化保護発展促進会」と「恩施州民間文芸家協会」の会長として「女兒会」の伝承と観光宣伝に尽力し、「女兒会」に関する文学作品まで書いている。恩施市政府の幹部は、石灰窯村での現地調査をもとに、「女兒会」の保護活動に尽力し、少数民族文化観光の先進地である雲南省での視察を元にその観光化に尽力している。行政の末端の郷政府の2人の幹部のうち1人は「女兒会」に関する最も古い記述がある『黄氏日用雑誌』という本の発見者で、後に「女兒会」の観光化に尽力し、もう1人は、石灰窯地域での現地調査に基づいて「女兒会」の由来に関する「十個棚女兒会」という舞台劇の本を書いて、舞台劇の演出も手がけている。3名の地域知識人（民族幹部、大学教授、公務員兼作家）も「女兒会」の観光開発に多くの提案をした。1人は「女兒会」の歴史を解明し、1人は「女兒会」の観光開発方法を提案し、もう1人は「女兒会」の宣伝をした。また、2名の地域企業家うち石灰窯企業家は石灰窯地域「女兒会」の活動組織や活動費用を協力しており、恩施市企業家の方も恩施市内で開催している「女兒会」の観光開発の強化、テーマパークの建立、民族や地域の観光宣伝などに

貢献した。さらに、2名の農民兼民族文化传承人は、石灰窯地域「女兒会」で民族文化の展示にたずさわり、その伝承にも尽力した。

1995年、「女兒会」を観光開発の目玉とすることを決定した恩施市の会議に参加した崔在輝さんによると、1990年代から始まった民族観光ブームにより、湖北省でも民族観光政策を実施し、また恩施地域を発展させるため民族観光に着手したという。当時、恩施は土家族が最も多い地域であったため、土家族を中心として民族観光を推進することに決まったが、当初、その観光開発はかなり難しかった。というのは、土家族文化の中から何を選べば観光資源になるのかということと、恩施地域に特徴的な民族観光を創成することが難しかったからだ。それでも、土家族文化の観光資源選びについて、例えば舞踊の「毛古斯（マグス）」、建築の「吊脚楼」などいろんな提案があったが、そのなかで「女兒会」は少数民族の婚姻習俗として観光化するのが容易であり、恩施の独特な恋愛習俗であったことや、また、「女兒会」が地域の祝祭日であるため観光資源として開発するのに一番ふさわしかったという。また、「女兒会」の自由恋愛という形式は、愛情の自由度を強調しているので、「女兒会」の観光化は、地域の人々にとっても、外来の観光客にとっても、土家族のいい文化とじてもらえるのではないかと考えたという。そこで、政府は「女兒会」を観光開発するために、他の民族観光地を視察した結果、愛情や婚姻に関する文化は、民族観光にはよく使われていることがわかり、その観光化に踏み切った。「女兒会」の観光化の方策も、ほかの地域の祝祭日を参考にしたほか、恋愛活動以外には、民族文化の歌や踊りなどの展示と、地域特産品の交流会を重視したという。さらに、賀孝貴さんが言うように、国内で多くの民族地域が祝祭日などを文化イベントに利用しているように、「女兒会」も「経済搭台、文化唱戲（経済発展に基づいた文化の発展）」という地域の理念に基づいて、地域および民族文化の発展に貢献する地域祝祭日のイベントの1つになっている。さらに、2010年以降、恩施州政府は「女兒会」の観光開発を強化するため、観光会社と共同で民族文化を開発している。郭輝さんなどの地域企業家は経済利益を目的としているが、「土家女兒城」テーマパークの建立は、「女兒会」や恩施地域の観光開発にとって重要な役割を果たしている。

また、雷翔さんなど地域の知識人は、特に1995年以降の「女兒会」において重要な役割を果たしている。「女兒会」の歴史などの研究や観光イベントとしての「女兒会」に対する提案は、文化の伝承や保護において重要である。また、「女兒会」は恩施土家族の代表的文化として、民族や地域アイデンティティの強化という面においても重要であった。

これらの事例のいずれにおいても、地域エリートは民族文化を民族観光を通して利用し、民族や地域の地位の向上および民族と地域アイデンティティの強化をはかっている。

一方、曾（2001）が指摘するように、同じ民族エリートであっても立場の違いによって民族観光において考え方が違っている。1つは民族観光を民族の自己表象の場として推進する立場であり、もう1つは、地域や人々の経済利潤追求を優先する立場である [曾2001: 98]。即ち、地域知識人や民族幹部の多くは、民族観光の開発を通して民族文化の伝承と保護さらに復興を目指すことに関心があり、対して、少数民族幹部や地域の企業家は経済利益を第一の目的として観光開発に民族また地域文化を利用する。

次に、「女兒会」は恩施土家族文化においてどう位置づけられているのかということについて

てみていこう。

3.5 「女兒会」と土家族の民族文化の表象

1995年からの全国的な民族観光ブームにおいて、湖北省と恩施地域は、国家の観光政策に沿って、「女兒会」を「少数民族的」文化として選び、観光資源として利用してきた。その上、他の土家族地域の民族観光内容と区別するため、地域特有の文化を恩施土家族文化の表象として注目し、観光資源として開発してきた。ゆえに、「女兒会」の事例では、かつて恩施州の特定の地域の習俗・祝祭日であったものが、政府と地域エリートによって選択され、さらに地域の観光会社などの協力で観光開発された後、恩施州全域の祝祭日になり、または恩施土家族全体の習俗の1つになっている。これが、「女兒会」が現在の「恩施土家女兒会」になるに至った過程である。

一方、「漢化」の影響が強い土家族の民族観光では、土家族文化から「女兒会」のような歴史と伝統的趣のある文化が抽出され、地域や民族の文化として創出された。政府は、地域知識人と民族幹部によって来歴が明らかにされた「女兒会」の民族的、地域的特質に焦点を当てて宣伝している。「女兒会」に関して、政府やマスコミなどが多くの出版物（本、論文、写真）を出しているということは、山下（1988）の指摘にあるように、「文化を書く」という行為そのものであり、それは「文化を客体化し、権威づけ、真正化することと深く関係している。（中略）文化が観光開発の対象に据えられることによって、文化は客体化され、物象化され、さらには商品化される」[山下1988: 16] ことである。

湖北省土家族の民族観光において、「女兒会」に代表される地域文化は、建国以降の文化大革命の最中であっても民族幹部によって密かに保護され、その後も民族観光ブームや地域政府の観光政策の下、地元のエリートにより観光化され、今や、地域また民族の代表的な文化になりつつある。このように、民族観光においては、歴史がある文化から、「少数民族的」特質と独特の地域性がある文化要素が、政府や地域エリートによって選別されて1つの民族文化になる過程は、「漢化」の著しい土家族の民族文化に対して、地域エリートが民族観光の力を借りてかなり意識的に行なった土家族としての民族文化の創造であり表象だといえる。

岡田（2001）によれば、中国の「民族識別」工作は、スターリンの「民族」に関する定義、すなわち「言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちに現れる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人びとの堅固な共同体」[岡田2001: 7] に基づいて行われたという。土家族の場合は、「民族識別」政策によって、1つの民族として認可されて以降、観光化や地域政府により創出された代表的民族文化は、土家族全体に対して、民族アイデンティティの強化という面で重要な意味を持っている。「女兒会」を地域全体また民族の文化として観光宣伝することは、現在の土家族に対して、新たな民族意識を強化する1つの契機とみることができるだろう。

4. おわりに

以上見てきたように、「女兒会」は、元々は石灰窯村というある特定の地域でのみ行われていた自然な集会という形から、次第に恩施地域の州政府、市政府、郷政府といった地域政府が

主催する観光イベントに発展するという過程を辿った。その活動内容と形式も、従来の経済活動と恋愛活動から、共産党の政治政策の宣伝、歌や舞踊、舞台劇の公演、体育大会等々、その活動内容が更新されてきた。また、多くの地域が祝祭日を文化イベントに利用しているように、「女兒会」も地域および民族文化の発展に貢献する地域の祝祭日のイベントの1つになっている。また、「女兒会」は、恩施地域の人々や土家族の人々自身が自分の地域文化や民族文化をアピールする文化表象の場としても利用されている。

「女兒会」の観光開発は、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による女兒会の発見と歴史的事実の掘り起こしや現地調査から始まり、1980年代に恩施州政府や恩施市政府が女兒会の観光化を主導したが、2000年代には大学教授を含む多くの地域エリート、民族幹部、知識人、民族文化伝承人と企業家も「女兒会」の観光開発に参加して、観光化の推進に貢献した。

先行研究でみたように、民族文化の創出において、少数民族エリートの重要性についての指摘はあるが、そのなかで少数民族エリートが一括りされ、どういう立場の民族エリートが民族観光開発にどう関わったかということについての細かい分析は見られない。しかし、本稿では、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出する地域エリートのなかには土家族以外の漢族や苗族などの出身者もいることや、また、恩施地域の政府関係者だけでなく、企業家、文化知識人、大学教授や農民出身の無形文化財伝承者もいることなどから、多様な立場の人たちが地域エリートを構成していたことが明らかになった。

民族観光において、地域エリートである「少数民族幹部」は地域や民族文化の発見に貢献し、文化を観光資源として地域経済の発展に利用した。すなわち、少数民族幹部は民族観光において、観光資源としての民族文化の発見と開発に一番重要な役割を果たした。その一方で、少数民族幹部は観光活動を利用して文化の保護や伝承にも尽力してきた。次に、「地域の知識人」は観光資源としての民族文化の利用方法や保護と伝承に重要な役割を果たした。特に、地域の知識人は、民族文化をもとにした文学作品の創作や舞台芸術化および文化の宣伝に貢献してきた。また、「民族文化の伝承人」は、民族文化の展示と宣伝に大きく貢献した。さらに、「地域の企業家」は、民族文化を観光資源として利用し、経済利益をもたらす一方、民族文化の保護や伝承にも貢献している。

また、湖北省土家族の「女兒会」の観光化は、これらの多様な立場の地域エリートによる早い段階での文化的価値の発見と民族文化の伝承や保護、民族や地域文化のアピールのための観光イベント化等々、多様な分野の地域エリートによる様々な努力によって成し遂げられてきたことがわかる。さらに、「女兒会」自体も、経済的機能から集会的機能を利用した文化的展示や民族的アピールへと大きく変わってきたことも明らかになった。

最後に、「女兒会」は、地域のエリートとの関わりや、国家の民族観光ブームのなかで展開されてきたことは、政府や地域エリートによる土家族の地域や民族の象徴としての「女兒会」という民族文化の創作と表象であり、問題は、土家族地域の大多数を占める一般の土家族の人々が、地域エリートによって創出されたこのような「民族文化」をどのように受けとめているのかということであるが、この点については、さらなるデータの収集が必要であり、今後の課題としたい。

参考文献

雨森直也

2008「観光化における歴史の再構成と地域住民の抵抗—中華人民共和国雲南省のペー族の新華民族旅遊村の事例—」『立命館大学人文科学研究紀要』91, pp.229-238

岡田宏二

2001「トウチャ（土家）族をめぐる中国学界の研究動向について」『東洋研究』142(12), pp.1-27

兼重努

1998「エスニック・シンボルの創成—西南中国の少数民族トン族の事例から—」『東南アジア研究』35(4), pp.132-152

2008「民族観光の産業化と地元民の対応—広西三江トン族・程陽景区の事例から—」愛知大学現代中国学会編『中国21』(3) 風媒社, pp.133-160

須藤廣

2013「妖精たちを消費する—アジアにおける少数民族観光の構造と変容—」『北九州市立大学国際論集』11, pp.39-55

瀬川昌久

2003a「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『東北アジア研究センター叢書』8, pp.135-174

2003b「中国南部のヤオ族と『盤王節』にみるその民族文化表象について」瀬川昌久編『文化のディスプレイ』風響社, pp.175-214

2013「少数民族の信仰・儀礼と現代中国—トウチャ, ヤオ, ショオを中心に」川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂, pp.223-246

曾士才

1998「中国のエスニック・ツーリズム—少数民族の若者たちと民族文化」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.3, pp.43-68

2001「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から—」『民族学研究』6, pp.87-105

高山陽子

2005「中国のエスニック・ツーリズムに関する人類学的研究」『旅の文化研究所研究報告』12, pp.49-60

2006「娯楽におけるエスニックの表象—中国のテーマパークの事例を中心に—」『中国21』2, pp.267-288

2007『民族の幻影—中国民族観光の行方—』東北大学出版会

陶冶

2010「観光開発に見る『民族文化』の表象：中国貴州省雷山県の『苗年文化節』をめぐる」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』69, pp.117-129

長谷川清

1995「美しき『西双版納』の誕生」曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『暮らしがわかるアジア

読本中国』河出書房新社, pp.295-301

馬建釗

2003「中国の少数民族と民族観光業」瀬川昌久編『文化のディスプレイ』風響社, pp.119-134

山下晋司

1988「国家的過程のなかの民族文化—インドネシア, トラジャにおける伝統文化の現代的位相—」『国立民族学博物館研究報告』13(1), pp.1-35

山路勝彦

2002「土家族とは誰か：中国の少数民族の創出と再編」『関西学院大学社会学部紀要』92, pp.41-53

横山廣子

2004「観光を中心とする経済発展と文化：雲南省大理盆地の場合」『国立民族学博物館調査報告』50, pp.181-203

2011「中国雲南省のチノ一族における社会変動と民族文化」『コミュニケーション科学』33, pp.17-44

中国語文献

王傑文

2016「論民俗傳統的『遺産化』過程——以土家族『毛古斯』為例」『北京師範大学学報（社会科学版）』4, pp.59-66

韓敏

2010「鄂西土家族地区旅遊資源開發探析——特色飲食文化」『湖北民族学院学報』12(28), pp.5-9

齊書清

1985「石寨『女兒会』的由来, 恩施市政協文史資料工作委員會編『恩施文史資料』第1輯（出版社なし）, pp.198-200

2003「我所的知道石寨『女兒会』, 政協湖北省恩施市政協文史資料委員會・湖北省恩施市民族宗教事務局編『恩施文史：恩施民族工作二十年』（出版社なし）, pp.183-188

潘光旦

1995『潘光旦民族研究文集』民族出版社, pp.160-330

馬振

2014「旅遊対手工芸類非物質文化遺伝傳承的影響——以土家族織錦『西蘭卡普』為例」『中南民族大学学報（人文社会科学版）』3(34), pp.24-27

李小紅・余翠華

2011「鄂西自治州土家族民俗旅遊資源的開發」『感寧学院学報』1(31), pp.29-30

劉紹敏・劉清華

2009『恩施土家女兒会演變揭密』長江出版伝媒・湖北人民出版社, pp.104-122

陳沛照・朱艷紅

2014「論民族文化与旅遊的協同發展——以湖北省恩施土家族苗族自治州為例」『長江師範学院

学報』12(6), pp.28-31

張穎

2008「論民族傳統文化旅遊開發的現代價值——以長陽土家族為例」『懷化學院學報』27, pp.16-18

田燕

2012「以文化保育為核心開發土家族旅遊資源的思考」『中南林業科技大學學報（社會科學版）』4, pp.34-36

薛熙明・覃璇・唐雪琼

2012「旅遊對恩施土家族居民民族認同感的影響——基於個人生活史的視點」『旅遊學刊』3, pp.27-35

湖北省恩施市政協文史資料委員會編

2005『恩施土家女兒會』中國文史出版社

恩施市地方志編纂委員會編

2011「女兒會」『恩施市鄉鎮街道誌叢書・紅土鄉誌卷』中共黨史出版社, pp.315-324

恩施州統計局・恩施州調查隊・恩施州調查觀測分局編

2016『恩施州統計年鑑2015』

恩施市旅遊局編

2016年『恩施旅遊指南』

Web 資料

恩施土家族苗族自治州政府ホームページ：<http://www.hbenshi.gov.cn>

恩施市紅土鄉政府ホームページ：http://hongtu.es.gov.cn/htgk/201206/t20120625_49397.htm

中華人民共和國國家統計局：<http://www.stats.gov.cn>

地圖：<http://www.baidu.com>

原稿受領日：平成29年8月31日；Received 31 August 2017

掲載受理日：平成29年12月16日；Accepted 16 December 2017